

道教と中国伝統医学 (第33回 道教医学の歴史—2)

吉元 昭治

吉元医院

「道教医学」という言葉を初めて使われたのは故三木栄先生が、その著『体系・世界医学史』(1972)が初めてである。先生はその中の「実理医学の本幹的發展の模型図」の中で世界医学の流れを東と西に分け東に「道教医学」という字句を使われている。

これは「仏教医学」の下にあり、明確な「道教医学」の定義は下されていない。日本での道教に関する本格的な研究が初まったのは、「日本道教会」が1951年に設立されている。演者の道教研究の師ともいえるべき、故吉岡義豊先生を初め福井康順、窪徳忠先生らが発起人に名をつらねられている。道教研究はまず「道蔵」の研究、戦前の中国現地の道教の紹介などから始まり、歴史、教義、祭祀などに目が向けられ、ニーダムの言うように「科学的でもあった宗教」という方面からの研究は我が国では乏しい、初め吉岡義豊先生の知遇をえて「道教と科学、文部省科学研究班」の一員に加えられ、さらに故酒井忠夫先生編の「道教」(1~3巻、1983)に共同執筆者に名をつらねることができた。道教と中国医学の関係を論じたのは初めてであったと思う。「日本医史学会」においては、「道教と中国伝統医学」というタイトルで第1回(1980)より現在まで30回以上連続発表をつづけている。内容は道教と中国伝統医学の関係概要、四大奇書中の医学的部分、民間療法、民間信仰、善書、薬枕、薬籤、韓国医学、日本古代史との関係など各方面に及んでいる。この間『道教と不老長寿の医学』を出版(1989)し重版となり、さらに台湾版(重版)、韓国版、中国版とほぼ東アジア全体で読まれた事になる。さらにこの方面の論文に多数引用されるようになった。この書の中で初めて「道教医学」という言葉を用い、かつその定義と、道教医学の三層構造にもふれている。

中国ではこの1年前『中国大百科全書、宗教巻』(1988)および『中華道教大辞典』(1995)などでの「道教医薬学」という字句が使用されている、この後中国では道教と中国医学との関係についての研究は急激にすすみ、「道教医学」という名称が定着しいろいろ多数出版されてきている。最近では「道教医学」を略称して「道医学」という出版が目につくようになり、さらに民間信仰の中にみられる医学的研究もある。

道教の研究は『道蔵』(正しくは[正統道蔵])を基本とするが、本総会第31回で発表した通り、実際の『道蔵』は時代により幾つかある。全体として5485巻余りの中から、医学的内容をもっている教典類を5年かけて抽出、分類、整理して、全22冊の私版『道典』(1987)をつくった。これを基としてさらに『雲笈七籤』『道蔵輯要』からも同じ作業を行い『道蔵提要』を参考し解説を加えた。これは近い出版予定になっている。

演者は中国医学の歴史を眺めるとき、その根底には道教という太い流れがあることと、中国古典、殊に、春秋・戦国時代の「諸子百家」などの古典と比較照合する必要性を痛感している。

今学会では以上の点をふまえた上で、発表したい。